

序 論

- このたび、ある方の計らいで、DC 近辺と、テキサスの両地域に住む日本人のためのコミュニティ新聞「さくら」に、月一回(全8回)の「連載」で投稿する機会を頂くことになった。
- つい先週、第一回目の最終原稿をお送りした。テーマは「信頼」であったが、その中に書いたことの一つは、「人間は一人で生きるようには造られていない」と言うことであった。
- 「共生」、即ち、共に生きることは、人間の、付带的、補足的必要の問題ではなく、人間のもっと実存的必要である。即ち、人間は人と一緒に生きることができなければ幸せにはなれないのである。
- 聖書は、それについて、丁度人間の体のようだという。私たちは、みな、ある人は目として、ある人は鼻として、ある人は耳として、ある人は足として、ある人は手として、それぞれその役割を果たしながら、皆で一緒に生きているのである。
- みんなが役割を持ち、皆が必要なのである。お互いがお互いを必要としているのである。誰一人、必要でない人はいない。
- それが、正に聖書が言う神の国、教会の姿である。教会は一人の人や、一部の人たちのものではない。そこに属するみんなのものである。
- したがって、教会が成長するためには、この共生、また協力が必須となる。
- 今日は、初代の教会が、如何にそのことを実践して成長して行ったか、そのごく一部分を見たい。

本 論

I. まず最初に、協力・共生の必要を示した背景として、「教会と問題 Problems」というテーマを考えたい。

★言い換えると、「教会」と言うと、どこか、できた人、聖人の集まりで、理想の場として、何の問題もない、problem free の場所のように思われがちであるが、本当はどうなのか？

★そして、この問題こそが、私たちに、共生と協力の必要を教えているのである。

A. 確かに、「教会」とは、一方で、天国の前味わい Fortaste と言える居心地の良い場所である。

1. それは、長い航行で傷つき疲れ切った船が、船体を暫く休めるために港に停泊して、次の航行に備えるようである。その意味で、港のことを HAVEN と言う。
2. あるクリスチャンの婦人は、教会に来ると「ただいま」と言い、教会を出る時、「行ってきます」と言った。教会の外での一週間の疲れを礼拝と交わりで癒し、新しい力を得て、再び世との戦いに出ていくためである。
3. 教会がもしそういうところでないなら、教会にか、自分にか、その両方かに問題がある可能性が高い。
4. イエス様は言われた。「神の国は近づいた」(マルコ 1:15)と。
 - (1)イエス様の福音、即ち十字架と復活によるイエス様の救いを受け入れるとき、私たちの間に、神の国、即ち天国の生活、素晴らしさが始まると言われたのである。
 - (2)だから、イエス様は、またこのようにも言われた。「・・・神の国は、あなたがたのただ中にあるのです」(ルカ 17:21)。即ち信仰者たちの間には天国のような交わりがあると。
5. 更にイエス様は言われた。「あなた方が互いに愛し合うのを見て、人々はあなたがたが私の弟子であることを知るのです」(ヨハネ 13:34-35)と。
 - (1)即ち、イエス様は、ご自分を信じ、弟子となった者たちの「しるし」、証拠、特色、魅力は、信じる者たちが愛しあっている姿だと言われた。
 - (2)要するに、教会の特色、魅力は、メンバーたちが愛し合っている姿だと言われるのである。これこそが、天国である。即ち、人々は教会に愛の国を見るのである。
 - (3)それが魅力となって、人々が次々に信仰に入って来る、教会に人が集まって来る。それが実現したのが、初代教会であったと聖書は記している(使徒 2:43-47)。

B. しかし、他方、矛盾するようであるが、教会は「問題だらけの不完全極まりのない」ところである。

1. それは、コリントの教会に宛てた二つの手紙を見ても、明らかである。そこには、問題だらけの教会の様子が書かれている。それらは：
 - (1)教会内の分裂・分派
 - (2)指導者(パウロ)に対する批判
 - (3)不道德な問題

(4)家庭・家族問題、などなど

2. 現に、今学んでいる「使徒の働き」の記録の中でも、

(1)先週学んだ5章では、教会内で、偽り、「偽善」問題があった。恐らく虚栄や競争も。

(2)今日の6章でも、後で更に詳しく触れるが、別の大きな問題として、教会内の差別や分派の問題、それに対する不満と争いに直面している教会の姿がそこにあった。

C. まとめるなら、教会は、「天国の種」が芽生え始めたところである。

1. しかし、それは、まだ完成とは程遠い。未完成品である。欠陥だらけである。まだ Under-construction 工事中である。

2. リンゴやミカンで言うなら、まだ、青い、スッパイ段階である。

3. 地上に完全な教会はない。

(1)ある人は、今行っている教会を批判し、完全な教会を求め、チルチル、ミチルのように「完全な教会」を求めて、転々とする。

(2)しかし、度々言うように。この地上に完全な教会はない。しかし、仮に完全な教会があったとしても、そこにあなたが加わった瞬間から、その教会は不完全となる。

D. 不完全なクリスチャンとして、また不完全な教会に生きるものとして、大切なことは：

1. 完全に向かう努力、前進と向上の努力を怠らないことである。

(1)聖書は、私たちは完全でないこと認めている。しかし、だからと言って、不完全で良いんだと、そこに甘んじたり、座り込んで良いとは言っていない。

(2)むしろ、完全に向かって勧め、努力せよと言っているのである。

(3)自転車と同じように、私たちクリスチャンは、前進しなければ霊的には倒れてしまう。

(4)それについて言っている聖書を開きたい。

●ヘブル6章1節「ですから、私たちは、キリストについての初歩の教えをあとにして、成熟(完全)を目指して進もうではありませんか。」

●ピリピ3章12-14節「私はすでに得たのでもなく、すでに完全にされているのでもありません。ただ捕らえようとして、追求しているのです。・・・ひたむきに前のものに向かって進み、・・・目標を目指して一心に走っているのです」。

2. 問題があることが問題だと思わないで、それを成長のチャンスとして受け止めることである。これが、今日の第二ポイントである。

3. しかし、その前にまず、ここにある「問題」が何かを整理しておきたい。

(1)それは、ギリシャ語を使うユダヤ人たちと、ヘブル語(厳密にはアラマイク語)を使うユダヤ人たちとの間の争いであった。

●当時の世界では、ギリシャ語(厳密には、コイナーと呼ばれる極めて平易なギリシャ語)が、今日の英語と似たような世界共通語として広く行きわたっていた。新約聖書はこのギリシャ語で書かれたので、キリスト教があのように急速に世界に広まったと言われる。

●それゆえ、外国生活をしたことのある人々は、皆このギリシャ語を使っていた。

●ここの出来事には、色々な背景が考えられるが、外国生まれ、或いは外国生活の長かったユダヤ人たちが、様々な事情で、エルサレムに戻って来たと思われる。彼らは、ギリシャ語を自由に使って生活をしてきたであろう。

●彼らは、昔の日本式に言うところ「バター臭い」(アメリカかぶれした、きざな、鼻に着く)ユダヤ人であった。

●一方で、エルサレムには、一生ユダヤから一歩も出たことが無い人から始まって、ギリシャ語は余り話せないとか、外国ものには余り馴染めないと言う、生粋で「ガチ」のユダヤ人というタイプの人でも沢山いた。

●この二つのグループは、同じ信仰を持ちながら、いつも、どこか、互いに冷たい目で見あって、批判し、対立していたようである。

●その対立が、表面化したきっかけは、食べ物の分配・配給がスムーズに行かなかったことであった。それをギリシャ語を話すユダヤ人たちは、ヘブル語を話すユダヤ人たちの意図的な悪意と差別行為と取ったのである。

- 彼らは言った。「ほら、見てごらん。やっぱりあいつらは私たちに意地悪しているんだ。だから、こんなに配給分が少ないんだ」と。
- そして、それらは、差別されたと思われる(本当に差別されたかは分からないが)本人たちだけでは終わらなかった。それを取り囲み応援する人たちと徒党を組んでの争いに発展した。
- そのようなツツツツとした不満が如何に大問題になったかは、12使徒たちが、その当時、すでに少なくとも1万は超えていたと思える「全会衆」を招集するほどに深刻な問題であった。

(2) イエス様が、最後の晩餐の後に、弟子たちのために捧げられた遺言的な祈りの中で繰り返されたことは、弟子たちの間の一致、彼らが一つとなることであった。

- しかし、今、ここ使徒の働き6章に見るものは、不一致であった。争いであった。分裂・分派であり、罵り合いもあったと思われる。

II. ここで、今日の第二ポイントとして、初代の教会、使徒たちは、どのようにして、この大問題を乗り越えたのかを考えたか？

A. 彼らがしたことは、まず第一に、弟子たち「全員」の声を聴こうしたことである。

1. 2節「そこで、12使徒たちは、弟子たち全員を集めて・・・」。
2. 当時、「全員」とは何人を意味していたのか分からない。
 - (1) 一日に信じる人が数千人も加わったとある中、恐らく数万人にも上ったと思われる。
 - (2) その全員が文字とおりに集まったのかは分からないし、信じがたい。
 - (3) しかし、ここで言えることは、使徒たちは、できるだけ多くの人の意見を聞きたいと思ったことである。
 - (4) 代表者だけの意見ではなく、皆の意見を聞くことの大切さを彼らは知っていた。なぜなら、代表者は必ずしも、皆の意見を代表したり、反映していないからである。
 - (5) ある意味で現代のポピュリストの興起、台頭の原因はここにあると言っても良い。
 - (6) ジョン・ウェスレーは言った。「私は、ロンドン中の一番小さい人からも聞かなければならない」と。
3. 全員が集まること、全員の意見を聞くことは易しくない。しかし、できる限り、私たちは、このことを努めなければならない。少なくとも使徒たちはここから始めた。
4. しかし、それでもなお、いつも、全員が集まり、その意見を集めることは現実には難しい。

B. そこで、使徒たちは、「全員」でなく、「代表者」を選ぶと言う、「組織」作りを実践した。

1. 神様は、この方法を、既にモーセの時代、彼に2-3百万にも及びイスラエルの民を導くために用いるべく彼の義父を通して実践するように導かれた。出エジプト記18:13-27。
2. 即ち、簡単に言うと、それまで、モーセはすべてを自分でやっていたが、このときから、組織作りをして、それらの仕事を、それぞれの部門の代表者に委ねて行ったのである。
3. アメリカ産業界で「鉄鋼王」と呼ばれた大成功者アンドリュー・カーネギーの墓碑には、このように記されている。「自分よりはるかに優れた人間を、自分の身の回りに置くことができた人間がここに眠る Here lies a man who was able to surround himself with men far cleverer than himself.」。
4. しかし、ここで大切なことは、教会を単なるエリート集団によって指導されるものにしてはならないことである。
5. その意味で、地方教会のあるべき姿としては、コリント教会への第一の手紙12章に見るように、神様がそれぞれに与えられた他の人にはできない賜物を皆が出し合うことである。
6. これらのことを、まとめて、言い換えるなら、
 - (1) 教会の中には、いわゆる「代表者」「委員」「Committee Member」というような、肩書きや名称を持つ人も組織・運営上生まれることもある。
 - (2) しかし、大切なことは、そのような名前やレコグニションがあってもなくても、「全員」が、それぞれの賜物を生かして、教会に参加・参与することである。
 - (3) よく教会の中でも、こんな話を聞く。「私は、何で委員に、長老に、役員に選ばれな

ったのか?!」と。そんな人に敢えて言いたい。「神様は全員を選んでおられる」と。
(4)人に選ばれること以上に、神様に選ばれることに心を用いたい。

C. ここで一番大切なことは、神様は、使徒たちを通して、選ばれる人に条件を付けたことである。

1. これらが、その条件であった。

- (1)使徒6：3「御霊と知恵とに満ちた、評判の良い人たち」。
- (2)同5節「信仰と聖霊とに満ちた」
- (3)同8節「ステパノは、恵みと力とに満ち」

2. 神様は、単に組織や賜物を用いるのではない。「人」を用いるのである。
聖徒 E. M. Bounds は、その著書で言う。

What the Church needs to-day is not more machinery or better, not new organizations or more and novel methods, but men whom the Holy Ghost can use -- men of prayer, men mighty in prayer. The Holy Ghost does not flow through methods, but through men. He does not come on machinery, but on men. He does not anoint plans, but men -- men of prayer.と。

彼は言う、聖霊に満たされた祈りの人を神様は用いられると。

D. ここで聖書が挙げている5つの条件のうち4つ(「恵みに満ちた人」以外)を簡単に触れて締めくりたい。

1. 御霊と聖霊に満たされた人とは：

- (1)自分の力で生きることを止めた人、いつも「主よ、主よ」と主の力で生きている人
- (2)自分の願望と野心を満たすことでなく、神様を愛すること、神様の御心を果たすことで心が一杯に満たされている人、聖霊で心が熱く燃やされている人である。

2. 知恵に満ちた人とは：

- (1)勿論世的にも賢い、知恵のある人に越したことはない。しかし、
- (2)聖書は、この世の賢者を愚か者とさえ言う。
- (3)役員として選ばれた人物の一人ステパノも次の7章で、ユダヤ人にストレートな説教をして、その怒りをかい、石打ちで殺される。●しかし、世的に言うなら、彼の説教と言うか、福音のプレゼンテーションは、余りにストレート過ぎたのではないか、彼は知恵が足りなかったのではないかと言われてもおかしくない。●しかし、彼の知恵はこの世の知恵ではなかった。
- (4)ここで言う知恵の基本は、聖書の言う知恵「神を畏れる」所から生まれるものである。神様の臨在と力と愛を十分に意識したところから生まれるアイデアである。
- (5)これが足りないと、教会は組織としては安定しても、運営上は普通の団体と変わりなく、どこか教会としての「香り」が薄くなくなってしまふ。

3. 評判の良い人とは：

- (1)勿論、教会内の評判も必要であるが、それ以上にここでは、一般の社会人として、即ち、父として、母として、息子・娘として、学生として、職業人としての評判である。
- (2)それは必ずしも、能力や成果のことでなく、その誠実さ等人格的な評判である。
- (3)それについてパウロも、テモテへの第一の手紙3章7節で、教会のリーダーとなる人の資質について、「教会外の人々にも評判の良い人でなければなりません」と言う。

4. 信仰に満ちた人とは：

- (1)**信仰の無い人は**、すべてが人間的計算からだけ算出する。
- (2)その人にとっては、神様の御心かどうか、まず人間的計算が優先される。神様はそれを無視されないはずだと決め込み、その許容範囲内でしか、神様の御心を求めない。
- (3)しかし、**信仰の人は**、人間的計算を決して無視するのでなく、むしろ、責任として十分に意識した上で、「神様、あなたの御心はどこですか」と祈り求める人である。

結 論

- EMバウンズが言うように、神様がリバイバルのために、用いられ、求めておられるのは、建物でも、設備でも、プログラムでも、組織でも、賜物でもない。それは、神様に捧げ切った「人」である。
- どんな人を神様は待っておられるのか？ 今日学んだことを振り返りながらお互いの人生を探りたい。